

深川富岡橋のたもとに奇妙な屋台が出ている——という噂を耳にしたのは、ちょうど敷入りの日のことだった。

新年一月十六日、俗に「地獄の釜の蓋も開く」と言われる敷入りは、盆の敷入りと共に、厳しいお店暮らしの奉公人たちにとっては一年のうちで何よりも楽しい日であった。一日お暇をもらい、親元に、家族の元に帰ってのんびりと過ごす。墓参りをする。勝手向きの具合がよく、奉公人思いのお店のなかには、この日、休みをとる奉公人たちに小遣いを渡すところもあり、たとえ雀の涙ほどの額であっても、日ごろは古着一枚自由には買うことのできない身分の者たちにとっては、それがまた輪をかけて嬉しいことになる。

ただし、浮かれ気分この一日に、気をつけねばならないこともあった。奉公人たちのなかには、日帰りのきかない遠方から来ている者もいるし、様々な事情で帰る家のないう者もいる。彼らのうえにも敷入りの浮かれ気分はひとしなみに訪れる。しかし、こ

う寂しい身の上のお店者たちは、概してこの日、食い物屋や岡場所や酒場、見世物小屋や芝居小屋など、日ごろ入りつけない遊興場所、厄介な騒ぎを引き起こしたり巻きこまれたりすることが多いのだ。それだから敷入りは、一面、十手持ちにとっては気の抜けない一日ともなるのである。

本所深川一带をあざかり、「回向院の旦那」と呼ばれる岡つ引きの茂七のところも例外ではなかった。通称の由来のとおり、回向院裏のしもたやに住まう茂七のところには、下つ引きがふたり出入りしているが、彼らにとつての敷入りは、朝早くから夜木戸が閉まるころまで縄張一带を見回り、この日だけお大尽気分のお店者たちが好んで立ち寄りそうな店々に顔をのぞかせて、それぞれの店の気質に合わせ、あんまりあくどいことをしなさんなど因果を含めておいたり、慣れない連中をよろしくなと頼んでおいたりという仕事に明け暮れるという一日だ。富岡橋のたもとの屋台の一件は、そういう行脚仕事のあいだに、下つ引きのひとり糸吉が耳に入れてきて、茂七のかみさんがこしらえた昼飯をかつこみながら話してくれたものだった。

「なんでその屋台が妙だって言うんだい」

糸吉よりも先にぶらぶら歩きの見回りから戻っていた茂七は、もう昼飯を済ませ、煙草をふかしていた。ふうと煙を吐きながら、どんぶり飯にくらいついている糸吉に問いかけた。

「熊くまの肉でも食わせるってわけじゃねえんだろう？」
 「そんなわきやねえですよ。あつしもちよいと見に行つてきたんですがね、売りもんはただの稲荷いなほ寿司すしでさ、へえ」すきつ齒はのあいだから盛大に飯粒を吹き飛ばしながら糸吉は答えた。「当たり前えの稲荷寿司ですよ、枕まくらほどでつけえつてこともありません」
 おひつを脇わきにおいて糸吉の食べつぷりをながめていた茂七のかみさんも、これには吹き出した。

「そんな稲荷寿司だったなら、糸さんが食わずに帰つてくるわけないもんねえ」

笑いながら、糸吉の差し出したどんぶりにお代わりを盛つてやる。そのあいだに糸吉は、畳に散つたごはんつぶを拾い集めて口に入れる。どうしても黙つて飯を食うことのできないおしゃべりな氣質たちの糸吉の、これは日ごろの習慣である。

「ほんどでさ。だけどあつしはあいだ食いはしねえですよ。おかみさんの飯をたらふく食いたいからね」

「無駄口はいいから、ちゃんちゃんと話せ」茂七が促すと、糸吉は二杯目の飯を頬張りながらもごもご言った。「夜つびで開けてる屋台やたいなんでせ」

「へえ。夜鳴き蕎麦そばでもねえのに、丑うし三みつツつ（午前二時）ごろまで明かりをつけて寿司を並べてるつてんで、あのあたりの町屋の連中が首をひねり出しましてね。そりゃあ、あ

のあたりの店はみんな宵つぱりですけどね、それだつて、仲見世の茶屋が店じまいするまでの時刻でしょう。丑三ツ刻どきまで開けてるなんてのは聞いたことがねえ。そんな遅い時分じゃあ、ふりの客なんか通るわけるわけがねえでしょう？ なんのために開けてるんですかね。しかも、そんな遅くまでやつてるくせに、翌日の昼前にはもう商いを始めてるつていうから働きもんだよね」

たしかにそうだ——と、茂七はちよいと首をひねった。

富岡橋のあたりといったら、名高い富岡八幡とみおかはちまんさまを背中にしよつているうえに、近くには閻魔堂えんまどうもある。一年中大勢の参詣さんぎ客が訪れる場所として、屋台に限らず食い物商売にはうつつつけのところだ。実際、出店でみせは数多く、様々な食い物飲み物が売られている。そして、糸吉の言つたとおり、夜は夜で八幡宮の仲見世の明かりを恋こつて訪れる男たち、洲崎すさきの遊郭帰りの客たちをあてこむことができるから、これらの店はみな夜更よふけるまで明かりをつけていることも多いのだ。

だがそれでも、真夜中すぎまで開けているということはない。少なくとも、茂七が知っている限りでは。いくら吉原よしかの向こうを張ると胸を張つてみても、やはりこちらの町は夜ともなれば物騒ものさわなところであり、物取りや追剥おいはぎ、猪牙舟ちよきふねに菰こもをかけたようなお手軽なあつらえて稼かせぐ女たちが跋扈はつごする土地柄である。そういう場所で、夜つびでこうこうと明かりをつけて稲荷寿司を売っているというのは、解げせないというよりも無謀なこ

とであるように、茂七には感じられた。

「で、おめえはその屋台の親父の顔を見てきたのかい？」

茂七の問いに、糸吉はうなずいた。「親分よりちよいと若いぐらいの年格好の親父です。鬚まげのここんとこらへんに——」と、耳の上のあたりを示して「だいぶ白髪しろががあります。そういうところは、親分より老おけてたね」

茂七は新年を迎えて五十五になった。五十の声を聞いたときに急にがっくり歳をとったような気分を味わったが、ここまできると五十路いそぢにもすっかり慣れて、還暦まではまだ間がある、まだそれほど歳じゃねえ、などと思ったりもするようになった。

「顔はどうだ。つやつやしてたか。それともしわしわか」

「さて」糸吉は真顔で思案した。「親分と比べてどうかってことですか？」

かみさんがまたぶつと笑った。茂七はふんと言つて煙管きせゐを火鉢ふちの縁ふちに打ちつけた。

「まあいい。おいおい、俺もその親父の様子を見にいこう。新参者の屋台の親父がそんな商売してたんじゃ、遅かれ早かれもめ事が起こるだろう」

すると、糸吉は目をばちばちさせた。

「それがね、それも妙つてば妙なんですけど、梶屋かぢやの連中もその親父のことじゃおとなしいんですよ」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。